

臨床看護師を大学看護教育に導入する取り組み ～PBL への参加を通じた課題把握～

新潟医療福祉大学看護学科 甲田充
同 西川薫, 阿部明美, 金谷光子

【背景】

近年、看護系大学の増大に伴い教員の不足が生じ、教育の質の低下が懸念されている。そのような中で新潟医療福祉大学看護学科（以下「本学科」）は、問題基盤型学習法（problem-based learning, 以下「PBL」）をテュートリアル形式で教育に導入している。PBLとは、患者の事例の中から問題を見つけ出しその問題を手がかりに学習を進めていく学習法であり、テュートリアルとは少人数（6名±α）のグループがテュータの陪席のもとに自主的に学習を行なうものである¹⁾。

しかしながら、1人の教員が複数のグループのテュータを担当しているのが現状であり、少しでも多くのテュータを確保することが必要である。この状況を受けて、本学科の所在する地域の潜在的資源である臨床看護師に着目し、実際に臨床看護師がPBLに参加した取組みを報告する。

【方法】

本学科の精神保健看護学演習（以下「演習」）は看護学科2年生後期に開講される1単位30時間（15コマ）の科目であり、その中の8コマをPBLに充てている。8コマの組立ては、2コマ連続（4～5限）で4週間かけて実施し、最初の3週間（6コマ）でwithテュータによるPBLと自己学習を交互に行なった後、4週目（7～8コマ）に全学生合同で発表会を実施した。

PBLの運営方法は、看護学科2年生85名を12グループに分け、1～6Gは4限にwithテュータによるPBL・5限に自己学習を実施し、反対に7～12Gは5限にwithテュータによるPBL・4限に自己学習を実施した。事例は、統合失調症、境界型人格障害、気分障害の3事例とした。

研究協力者の要件は、学士もしくは認定看護師資格を有する精神科臨床経験3年以上の看護師とした。研究協力の依頼は、所属病院の看護部長に研究説明を行ない該当看護師の紹介を受け、書面による同意を得られた看護師を対象とした。

【結果】

本学科近郊に所在する異なる精神科病院に勤務する看護師3名が研究に同意し、PBL形式で行なわれる事例検討に参加した。3名共にPBLおよびテュータの経験はなかった。臨床看護師が参加した内容は、①PBLに臨む上での事前研修会、②8コマのPBLへの参加、③各PBL終了後のアフターミーティング、④全PBL終了後の半構成的インタビューである。

1. 事前研修会

PBL参加に当たっての事前教育を目的として、初回PBL実施の前月に1日（9時～16時）を費やして事前研修会を実施した。研修内容は、①本学科のアドミッションポリシーとディプロマポリシー、②精神看護学領域の授業構成と学習内容、③PBL学習

およびテュータの役割、④PBLで用いる事例のねらいと目的の共有化、⑤PBLの模擬体験、⑥事前研修会の振り返り、である。

2.8コマのPBLへの参加

テュータは精神看護学領域の教員3名が担い、臨床看護師は学生とともに学ぶ臨床看護師として位置づけ、各教員と臨床看護師がペアとなりPBLに臨んだ。1コマで各ペアが担当した学生G数は2Gとなり、2部屋を往復する形でPBLに加わった。

3. アフターミーティング

各PBL終了後、1時間程度のアフターミーティングを実施した。語るテーマは設定せず、感じたことをありのままに語ってもらうことで自らの体験を整理する時間として位置づけた。臨床看護師の語りの内容は、学生の反応から得られる自分自身の学び、学生への介入方法や自分自身の役割（位置づけ）の戸惑い、学生のこれまでの学習状況やPBLでの到達度の質問などがあつた。

4. 全PBL終了後のインタビュー

全PBL終了後、1時間程度の半構成的インタビューを実施した。インタビューから臨床看護師を大学教育に導入するに当たっての課題に焦点を当て分析した結果、①事前研修の充実、②PBL参加場面での戸惑い、③参加のための事前調整が抽出された。

【考察】

臨床看護師をPBLに導入するに当たり、事前研修会およびアフターミーティングを通じて臨床看護師が感じる困難の解決を図りつつPBLに臨む環境を整備した。しかし実際は、様々な戸惑いを抱えながらPBLに臨んでいたことが明らかとなった。

戸惑いが生じた原因として、研究者が臨床看護師をテュータとして迎える環境を整備できなかったことが挙げられる。「テュータでもなく学生でもない」という中途半端な位置づけが彼らの役割を不明確なものとしてしまい、結果として大きな戸惑いの要因となっていた。さらに、1コマに複数のグループに加わったことで、学生のグループが持つ力²⁾を把握しづらかったことが考えられる。

今後は、臨床看護師に求める役割を明確化した上で事前研修会を実施し、アフターミーティングを通じてPBL実践中に感じた様々な戸惑いの解決を図っていく事が大切であると考えられる。

【結論】

臨床看護師を看護教育に導入する取組みとして臨床看護師3名が本学科のPBLに参加した結果、様々な戸惑いを感じながらPBLに参加していた。看護教育に臨床看護師を導入するに当たり、臨床看護師の役割を明確にした上で入念な事前研修等を行ない、彼らを感じる戸惑いに着目し適宜解決を図っていくことが重要だと考えられた。

（本研究は2010年度新潟医療福祉大学研究奨励金萌芽的研究費の助成を受けて実施した。インタビュー等から明らかとなった臨床看護師を大学教育に導入する上での課題の詳細は、2011年日本看護科学学会において発表予定である）

【引用・参考文献】

- 1) 吉田一郎編:実践PBLテュートリアルガイド, 南山堂, 2004, 3p.
- 2) 武井麻子著:グループという方法, 医学書院, 2002.